

石井忠雄・小川政弘作 **「神、人とないて」**

<前編>

- 村山美佳の母 ただいまあ。
- 父 おい、今 何時だと思ってるんだ？
- 母 だって、高校時代のお友達に会って、お茶を飲んでたらこんな時間に…。
- 父 ウソつけ。男と会っていたんだろう。おれには分かってるんだ。
- 母 何が分かってるって言うのよ。
- 父 今日な、夕方会社から電話したんだ。すると美佳が出て、「男の人から電話があって出かけた」って言ってたぞ。
- 母 美佳、美佳、ちょっと来てよ！
- 美佳 何よ？
- 母 あんた、何言ってんのよ。いつわたしに男の人から電話がかかってきたのよ。ねえあなた、美佳はデタラメ言ってるのよ。そうでしょ、美佳？
- 父 ほんとにそうなのか？
- 美佳 どうだか忘れちゃった。もう遅いし、あした学校あるんだから、いい加減にしてよ。
- 母 美佳。わたしはあんたをそんな子供に育てた覚えはないわよ。はっきりウソだと言ってちょうだい。ママはパパから疑われているのよ。
- 美佳 いいでしょ。疑われるようなことしてるんだもの。
- 母 それ、どういう意味?!
- 美佳 うるさいわねえ。自分の胸に聞いたら?!
- (効果音) (ドアをバタンと閉めて自分の部屋に入る。)
- 父、母 (口々に)美佳、開けなさい。
- 父 全く、なんていうやつだ。
- 美佳モノローグ ああ、ヤだ ヤだ。どうしてあいつもケンカばかりしているんだろう。わたし、ママが浮気してるの知ってるんだから。でも、“自分はいつも正しい”っていう顔して、ウソをついてるんだから。(間)なんだか眠れなくなっちゃったわ。吉川先輩、今何してるかなあ。こんなとき、ぎゅっと抱き締めてもらったらなあ。今から行ってみようかな。
- ナレーション わたし、村山美佳。青春高校 2 年生。好きな女をつくってあまり家に寄り付かない父と、その父への当てつけのように、浮気をしている母。そして、お互いに裁き合っているこの両親のいる家庭に、もうすっかり嫌気がさしている。そんなわたしが今一番会いたいのは、高校のバスケット部の先輩で、今大学 1 年の

吉川毅先輩だった。

わたしは、騒ぎが収まるのを待って、家をそっと抜け出し、近くのアパートに住む先輩の家に行ってみた。

(効果音)

(ノック音)

美佳

先輩。…先輩。

吉川毅

だあれ？

美佳

わたしです。美佳。

(効果音)

(ドアが開く)

吉川

なんだ、君か。どうしたんだ、こんな時間に？ まあ入れよ。珍しいなあ、君がおれのところに来るなんて。

美佳

泊めてください。

吉川

ほー、まじめな美佳が。いいのかい？ どうなっても、おれ知らないよ。

美佳

いいの。家にいても面白くないんだもん。

ナレーション

わたしはその夜を、先輩の家で過ごした。勧められるままに、ビールや水割りをあおって、気がついたら先輩のベッドの中にいた。不思議と自分のしたことに罪悪感はなく、何か一人前になったような、両親へ復讐したような気さえていた。わたしが家に戻ったのは夜明けの5時ごろだった。

(効果音)

(ドアの開く音)

母

美佳。美佳なのね？

父

おい、お前はどこへ行っていったんだ？ ゆうべお前の部屋に行ったらもぬけの殻だ。今まで何していたんだ？

美佳

なんでわたしの部屋をのぞいたのよ？

父

なんて言い草だ。

母

あのね。お前が本当のことを言っているかどうか、お父さんと確かめようと思って行ったのよ。お前がウソをつくからいけないのよ。

美佳

またそのこと。それはあなたたち二人のことでしょ。わたしに関係ないわ。

父

それはそれでいい。ところで今までどこにいたんだ？ 高校生の女の子が、親に黙って外泊するなんて普通じゃないぞ。

母

そうよ。そんなこと不良のすることよ。

美佳

不良で悪かったわね。

(効果音)

(バタンと戸を閉める音)

(音楽)

(ロックミュージック)

父

美佳、待ちなさい。

母

本当にしょうのない子ね。

父

お前が悪いんだ。母親のお前が夜遊びなんかするからだ。

母

何言ってるのよ。あなただって、出張とか何とか言って、どこへ行ってるんだか。

わたしが知らないとも思っているの？

父 なんだと？

母 何するのよ。

父 口で分からないならこうしてやる！

母 何よ、何すんのよ！

(効果音) (争って、イスがガタガタ、物が棚から落ちる音)

(音楽) (ロック、次第に高まって)

美佳 やめて！ やめて読もう！

(音楽) (絶叫とともに鋭くカット)

(学校で)

祐子 美佳、どうしたの？ はれぼったい顔して。

美佳 祐子、わたし、ついにやっちゃった。

祐子 “やった”って、何を？

美佳 “C”よ。

祐子 “C”？ “C”ってあの“C”？ へえー。だれと？

美佳 吉川先輩よ。

祐子 ふーん。で、どうだった？

美佳 どうって？ どうってことないけど。

祐子 その“どうってことない”ことに、自分をかけたわけ？

美佳 何よ、その言い方。あ、祐子、妬^やいてるんでしょ。

祐子 わたし、それどころじゃないのよね。由美がさ、赤ちゃんできちゃって、「皆で中絶の費用カンパしよう」って言うんだけど、そんな無責任なことってある？ カンパって言うけどさ、人殺しのためにお金を集めてるんじゃない。断ったら、早苗たちから、「もう友達じゃない」ってさ。美佳、あなたどうする？

美佳 “どうする”って。友情は友達が困ってる時にあるもんなのよね？ なら協力しなければならぬんだけど、祐子の言うように、殺人の手伝いはしたくないしね。ねえ、相手の男の人、何もしてくれないの？

祐子 それができないから皆でカンパしてるんじゃない。

美佳 相手の男の人って、だれなの？

祐子 美佳はそんなこと知らないほうがいいんじゃない？

美佳 どうして？ どうしてよ？

祐子 あんたの夢つぶしたくないからね。

美佳 それ、どういう意味？ まさか…。まさか吉川先輩じゃないんでしょう？ あの人はそんな人じゃないし。ゆうべだって、「初めてだ」って言ってたもの。

祐子 そうね。吉川さんじゃないかもね。でも、あなたも気をつけることね。

ナレーション それからも、わたしは、何回か吉川先輩の家に行った。会うと誘われるままに

体を許し、「これが二人の、二人だけの愛のあかしなんだ」と自分に言い聞かせていた。そしてその度に、父母との溝は深まり、わたしは次第にいたたまれなくなっていった。

- 美佳 ねえ、祐子。わたし、家を出て自立しようと思うの。
- 祐子 どうしたの？ また親と何かあったの？
- 美佳 もうあんな家にいるの、イヤ。息が詰まりそう。
- 祐子 それでどうするの？
- 美佳 学校やめて、勤めるの。ねえ、何かあったら、吉川先輩を通して連絡してくれる？
- 祐子 ねえ、まだ吉川さんと付き合ってるの？
- 美佳 運。だって愛し合っているんだもの。
- 祐子 美佳…。あんた、本当に吉川さんのことそう思ってるの？ 彼もあんたのこと好きだって？
- 美佳 そうよ。彼、会うたびにそう言うもん。なんでそんなこと聞くの？
- 祐子 ン？ ならいいんだけど、あんまし深入りしないほうがいいんじゃない？ アレのほうはうまくやってんの？ 赤ちゃんができれば大変だよ。
- 美佳 それならそれでいいわよ。親を困らしてやれるんだから。
- 祐子 美佳ったら。
- ナレーション あきれたような、少し困ったような祐子の顔をしり目に、わたしは内心得意げな、勝ち誇ったような気分になっていた。それは親に対してでもあり、祐子に対してでもあった。それがどんなに愚かな、独りよがりの思いだったか、その時のわたしは知る由もなかった。
- (音楽) (デパートのクリスマスソング)
- 美佳モノローグ もうこんな季節か…。デパートも書き入れ時だな。吉川先輩も「スーパーの配達をやる」って言ってたけど、わたしの何か探そう。家を借りて一人暮らしをするんなら、仕事だって、長続きするやつでなきゃダメだし。先輩が教えてくれた喫茶店に行ってみようかな。
- ナレーション わたしは、その喫茶店を探しながら、夕暮れの道を歩いていた。
- (効果音) (都会の雑踏)
- 美佳モノローグ あれ、キリスト教の看板かぁ。(読む)「あなたに贈るクリスマス。人となられた神」か…。ああ、これ、イエス・キリストのことだ。マリヤとヨセフが旅をして…。ユダヤのベツレヘムの馬小屋で…。
- (音楽) (クリスマス賛美歌。回想)
- 美佳(少女) (エコー)「いと高きところでは、神に栄光があるように！」
- 羊飼(少年) (エコー)あ、あの光はなんだ？
- 美佳(少女) (エコー)「今日、ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになっ

た。この方こそ、生けるキリストです！」

ナレーション わたしは思い出していた。それは、もう何年も前わたしの心の中に眠っていた、遠い日の教会のクリスマスの思い出だった。

美佳モノローグ (読む)「東京中央教会。牧師、富山宏。富山、宏…。あ、これ、わたしを教えてくれた教会学校の先生だ！ 牧師になったんだあ！ …でも、今のわたしには関係ないな、教会も、イエス様も。わたしには吉川先輩がいるし、それより仕事を探さなきゃ！

(効果音) (雑踏。デパートのクリスマスソング)(FO)

ナレーション こうしてわたしは、喫茶店のウエートレスをするようになった。そして、持っていた預金を全部はたいて、小さなアパートを借り、一人暮らしを始めたのだ。あれは 11 月の末だった。初めてもらった給料を手にしたわたしは、吉川先輩に祝ってもらおうと思って、ケーキを買い、弾む心で彼の家に急いでいた。その時、わたしは、とあるホテルの前で、そこから出てくる若いカップルに出会い、アッと息をのんだ。

美佳モノローグ 吉川先輩！… 祐子！

(音楽) (ショッキング)

<後編>

美佳 あ、吉川先輩！ あ、祐子！ どうして、祐子？ これ一体どういうこと？ 説明してよ。

祐子 悪いのは吉川さんよ。吉川さん、こんな純情なお嬢さん だましちゃダメじゃない。でも彼が付き合っているのはわたしだけじゃないのよ。クラスの早苗だって、宏美だって、あのカンパした由美の相手も実はね…。

吉川 (さえぎる)やめろよ。そんなこといいじゃないか。美佳、ごめん。だますつもりじゃなかったんだ。

(音楽) (悲しみ)

ナレーション わたしは、自分の愛が踏みにじられた悔しさで声も出なかった。

美佳モノローグ だれのために、わたしは自分の大切なものを捨てたんだろう。何のために自分は学校をやめて家を出てやってきたんだろう。これから何を支えに生きていけばいいんだろう…。

ナレーション わたしは、木枯らしの吹く街をあてどなく歩き始めた。わたしの頭は空っぽだった。どこかで、飲めないお酒をずいぶん飲んだような気がする。どこかで声をかけられた男の人についていったよう泣き気がする。そして気がつくと、真夜中の町外れに立っていた。そこには屋台があって、一人の青年が立っていた。

村山信男 君、どうしたの？ 何があったの？

美佳 わたし？ なんでもないわよ。ちょっとお水一杯ちょうだい。

信男 そんなに酔っ払って。ここに座りなさい。水あげるから。

美佳 ああ、おいしい。

信男 あの、寒いんなら、おそばでもどうかな。熱いのを作るから。

美佳 おそばか。一杯食べようかな。そう、晩ご飯まだだっけ。

信男 どうしたんだい？ 女の子が一人で。もう午前2時だよ。

美佳 世の中ってイヤねえ。みんな“自分だけ正しい”って顔して、人を踏みにじり、だまして、平気にいるんだから。汚いね。

信男 そう言われると、弱いんだ。僕もずいぶん人をだましてきたからなあ。

美佳 意外と正直なのね。女の子はどう？

信男 運。2年ほど前に、好きな子がいたんだ。でもほかにも付き合っている子がいて、うまくやってたつもりが、バレちゃって、一人の女の子が自殺してしまったんだ。

美佳 (真顔になって)それで、あなた、どうしたの？

信男 彼女の両親から責められたけど、どうしようもないんだ。僕は父母が早く亡くなったので、伯父の家で厄介になっていたの、皆から責められ、ついに家を逃げ出しちゃったんだ。そして、ふらついていたら、教会の牧師さんと出会って、教会で厄介になるようになったんだ。

美佳 今でも教会に通ってるの？

信男 運。それから聖書を読み出し始めて、自分ってなんだか知ったんだ。

美佳 なんだったの？

信男 うん。僕は自分で、“自分は正しい”って思ってたけど、友達をもてあそんで、問題が起こるとさっさと逃げ出してしまう。こんな卑劣な男はいないよ。聖書の言う、“罪びとの頭”^{かしら}ってやつだ。でもね、でもね、こんな僕を愛して救ってくれる方がいたんだ。

美佳 それが牧師さんっていうわけ？

信男 いいや、そうじゃない。イエス・キリストっていう方だよ。もうじきクリスマスだろ？ その時に全世界で誕生をお祝いする、あの方だよ。僕みたいな罪びとを救ってくださるために、あの十字架で身代わりに命を捨ててくださるために、この地上に来られたんだ。

美佳 罪びとかあ…。そう言えばわたしも同じかなあ。いや、わたしは違うわ。わたしはあなたと違って被害者だもの。友達からだまされ、踏みにじられた被害者よ。

信男 “被害者”ね。僕もそう思ってたなあ。

美佳 (食べ終わって)ごちそうさま。いくら？

信男 いいよ。今日は僕のおごり。

美佳 そんなのダメよ。わたし、あなたにおごられる理由、何もないもの。

信男 そうかい。じゃ 300 円頂きます。

美佳 300 円？ 安いよね。お財布…と。あら、どうしたのかしら。お給料袋は？ あら ない。ないわ！ どうしたのかしら。もしかして、さっきの男に…。どうしよう。すみません。お金なくしてしまったの。家に帰ればなんとかなるんだけど。

信男 家はどこ？

美佳 電車で 2 つ先。

信男 じゃ、いいよ。帰り、困るだろう？ これタクシーでも拾ったら？

美佳 こんなにたくさん。悪いわね。じゃ家に着いたら、きっと返しに来ます。

信男 名前を聞かせてくれるかな。僕は村山信男です。

美佳 美佳。村山美佳っていうの。なんだかきょうだい兄妹みたいね、同じ名字で。

信男 美佳さん。今日は僕のあかしを聞いてくれてありがとう。君もいつか、教会においでよ。待ってるから。

ナレーション その夜の屋台の青年との出会いは、ズタズタになったわたしの心に不思議な温かさとなって残った。自らを“罪びと”と言い切り、「この自分のためにイエスキリストは命を捨てられた」と語る時の、彼の熱っぽい口調が、時々胸をよぎっては、冷え切ったわたしの心をかき立てた。でも結局、彼には会いに行かなかった。お金も借りっ放し。それどころか、給料をなくして家賃の支払いに困り、サラ金に手を出してしまったのだ。

サラ金の男 (フィルター音)もしもし、村山美佳さんいます？

美佳 はい、わたしですが。

サラ金の男 (フィルター音)おい、どうなってるんだ！ 借りたものは返すのが常識だろ？

美佳 すみません。もう少し待ってください。

サラ金の男 (フィルター音)いつまで待たせれば気が済むんだ？ それとも、お前の店のオーナーに言ってやろうか？

美佳 それはやめてください。必ずなんとかしますから。

サラ金の男 (フィルター音)それじゃ、今夜、きっちり決まりをつけてもらうよ。できなきゃソープランドでも稼いでもらうからな。

(音楽) (街の雑踏。「ジングルベル」)

ナレーション その夜、わたしは家に帰らなかった。そして、ケーキの箱を手に家路を急ぐ人々でごった返す街の中へ、フラフラ当てもなく出ていった。そう、今日はクリスマスイブだった。行きかう人々の明るい笑顔を横目で見ながら、わたしの心は、その時、紛れもなく絶望のどん底だった。

(音楽) (クリスマスの賛美歌)

女子教会員 ちょっとお寄りになりませんか？ 今、礼拝が始まっています。

ナレーション そこは教会だった。それも、よく見ると、数週間前に看板で見た、東京中央教会だった。中では、牧師さんのお話が始まっていた。

富山宏牧師 (オフ)「宿屋には泊まる場所がなかった。」皆さん、人となられた神のみ子をお泊めする場所は、家畜小屋しかなかったのです！

ナレーション わたしはドキドキしながら、その牧師さんの顔を見た。それはやっぱり、あの懐かしい富山先生だった。礼拝が終わると――。

牧師 美佳ちゃん。君、村山美佳ちゃんでしょう？

美佳 富山先生?!

牧師 やっぱり美佳ちゃんか。村山君に君のこと聞いて、“もしかして”と思ってたんだ。いやあ久しぶり。よく来たね。ところで村山君と会わなかった？

美佳 いいえ。

牧師 そうか、行き違いになったのかなあ。いやね、1 か月ほど前に村山君が君に会ってから、ずっと君のことを心配し、探し続けていたんだよ。今日ね、やっと君のアパートが分かったって言って、このクリスマス祝会に誘いに行ったんだ。

女子教会員 先生、電話です。村山さんがケガをされ、市立病院に入院したそうです。

ナレーション しばらくして戻ってきた富山先生の顔を見るなり、わたしは聞いた。

美佳 あのう、村山さん、どうかしたんですか？

牧師 なんでも、君のアパートの前で数人の男に殴られたらしいんだ。すぐに行ってみよう。君も来るかい？

美佳 はい。

(効果音) (車の発進音)

ナレーション わたしは、先生の運転する教会の車に乗り込んだ。あの男たちに打ちのめされて、血まみれになって横たわっている村山さんの姿を想像すると、わたしの胸はかきむしられるようだった。

美佳 先生、村山さんはわたしの代わりに殴られたんです。わたしがサラ金からお金を借りなければ、こんなことにならずに済んだのに。――わたし、村山さんに初めて会った時、なんだかホッとしたんです。お金まで借りて。それをわたし、返しもしなかったばかりか、こんな目にまで…。(涙ぐむ)

牧師 いいんだ、美佳ちゃん。あの日のことは村山君からも聞いた。あの時の君は、「かつての自分のようだ。だから、そのままにしておけない」って、何もそこまでと思うくらい、彼は本気で君のこと心配していたよ。

美佳 ほんとに？――わたし、今まで自分は“被害者”だと思っていた。“自分は間違っていない。悪いのはみんな周りの人間”と思っていた。父も、母も、親友も、男友達も。でも…。

牧師 彼もそうだったよ。自殺した女のこのことまで、始めは「勝手なマネしやがって」って、ふてくされていたんだ。3 年前、うん、あれもちょうどクリスマスイブだった。あの晩、イエス様のことを聞いて、男泣きにオイオイ泣きながら、自己中心の罪を悔い改めて、彼は生まれ変わったよ。

ナレーション わたしの頭の中で、その時、なぜだか知らないけど、血まみれの村山さんに、あの十字架のイエスの姿が重なっていた。

車は、駅の前で境界の人々がキャロリングをしている前を通り過ぎた。

(音楽) (賛美歌「神のみ子は」)

ナレーション どの顔も、救い主の誕生を告げる喜びで輝いている。わたしは涙でかすむ目で、いつまでもそれを見送っていた――。

(音楽) (賛美歌、次第に高まって――)

<完>